

ビクターの創業者

ベン・ガードナーを偲ぶ

―若き日の私の放浪記―

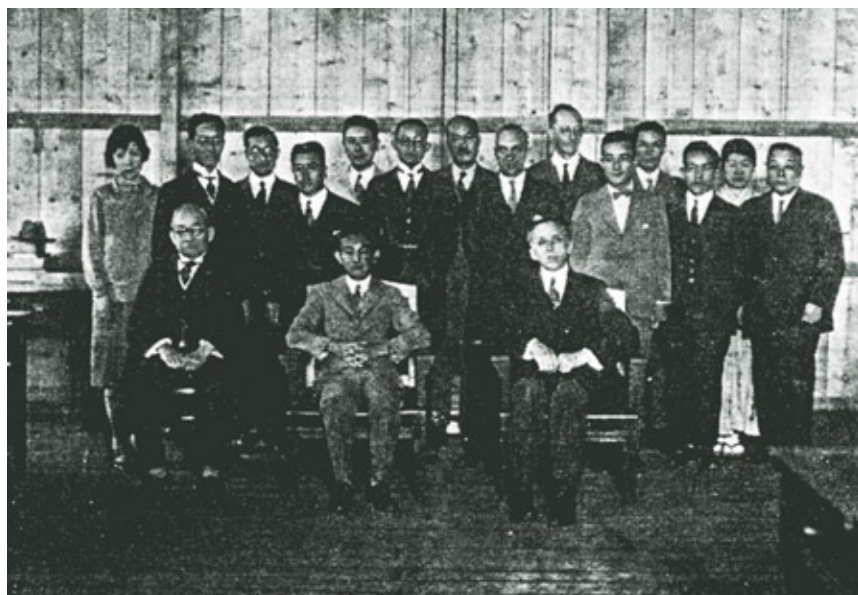
野
辺
游
吉

ビクターの創業者

ベン・ガードナーを偲ぶ

復刻版

—若き日の私の放浪記—



「写真」前列中央、朝春宮鳩彦親王、右隣ガードナー、後列左から一人おいて
桜井、筆者、一人おいて玉川、岡、常松、ステムション、スタッツ、
伴野、竹田、福井のみなさん、(撮影昭和3年4月)

日本の象徴富士山は、明治一〇年（一八七七）頃に
は、東京都内から望見される日数は、一年間を通じて、
ほぼ一〇〇日ほどであったという。それが九〇年を経
た昭和四五年の観測によると、僅かに三九日となって
しまった。その後一〇年余を経た昨今では、もつと短
期日になっていることと思う。それだけに、日本の進
歩発展はもとより、東京都の変転巨大化も、驚嘆のほ
かはない。

この事実をしても、約五〇余年前のビクター創立時
と、今日のビクターの隆盛発展の巨大化は想像に絶す
るものがある。勿論、名山富士は、東京から今や常時
望見し得ないとしても、富士は、その幽峯の神爽を失
っていない。さりながら、世は移り、人々も変り、ビ
クターの創立者ベン・ガードナーの訓育を親しく受け、
創業当初の精神を知る人々は大方故人になつてしまつ
た。そして、親しくその訓陶を享け得て、なを生き残
つて居る者は、老生唯一人となつた。過ぎにし越方を

想うと茫々夢のようでもあるが、ガードナーの人とな
りと、その魂がいまだに、私の心に鮮烈に刻されてい
る。

私も齡既に満八十二歳余に達し、余生の徒然なるま
まに、ビクターの創立者ベン・ガードナーとの出会、
彼の人となりと、古いビクターの心を書き残して置き
たい。

ガードナー（以下ガ氏と呼ぶ）と私との巡り会いの
いきさつと、ガ氏によつて強く植付けられたビクター
の心を綴るまえに、まづ、私のビクター入社までの放
浪記を語り、ガ氏が私の生涯に、予期もしないほどの
衝撃を与え、私の人生航路を思わぬ方向へ屈折させて
しまった経緯をのべねばならない。

私は、雄大な自然と、数々の歴史をもつ薩南の鹿兒
島市で生れ育つた。中学は、鹿兒島一中で、順当に旧
制第七高校に進んだ。中学時代は、あまり勉強するで

もなく、寧ろ、雑多な文学書を読みあきつたりしていた。中学の四、五年ともなると、何れも陸士か兵学校か、高校の入試準備にひたすら精進し始めるのが一般であった。私は、風来坊のこどく呑気に遊びほうけていた。

四年の夏休みのごときは、僅かな小遣いを懐にして、薩摩肥後、日向、大隅の一週無銭旅行を企て、脚絆に下駄ばきで、単身弧影飄然と旅に出た。それも、幼少の際、父がアフリカ探険で暗黒の世界に灯をとぼしたりビンゲストンや、スタンレーの物語りを聞かしたりしたことがあったので、多少そうした冒険的好奇心があつたかもしれない。西薩肥後の海辺では、山陽の詩にある「雲か山か呉か越か」も天草灘の崇高な落日の景に、若い心を躍らせた。西南の役で有名な薩摩と肥後境の三太郎峠の険を烈々たる酷暑を喘ぎ喘ぎ越した。肥後路に這入ては、徳富蘇峯、芦花の誕生旧家を尋ね、爽竹桃の真赤な花の下に憩いもした。さらに九州を東へ横断して日向路に入り、宮崎の大淀川の夜の星空の美しき、宇宙の神秘さに、打たれつゝ、夜露に濡れて歩を延ばし、青島に泊した。当時は至極ひなびた漁師

村で二、三軒の安宿があつたにすぎない。そこで日向灘の壮麗極まりない日の出を望み見ては、救世の大偉人誕生に出会えたような感激を覚えた。さらに荒磯浴いに南下して、鶯巣という一寒村の茶屋に休んだ頃から風雨模様になって、雷までどゞろき始めた。茶屋の老婆が、これから先は道路がなく、荒磯の岩つたいに行かねばならぬ、下駄ばきでは無理だから、草鞋にせよといつて、金槌で草鞋を丁寧に叩いてやわらかくし、履かして呉れた心根を今に忘れない。今も、鶯巣は昔のまゝの寂しい村だ。いよいよ道なき荒磯つたいの岩々を辿り、激しい雷雨に打たれつゝの抜渉は若き日の冒険心をもさそつた。鶴戸神宮近くから道を迷つて、山中に這入りこみ、炭焼小屋にたどりついた。鶴戸は、方向違いで、山嶺を越して飢肥に出るより仕方がないと教えられ、提灯を借りて暗夜山越しで、くたくたになって、飢肥に辿りついた。鹿児島一中に来ていた友人の家を漸くたづねつけて、一夜をすごした。飢肥は昔日の外相小村寿太郎の生地である。さらに大隅路へと入り、ようやく一ヶ月近くの、文なしの漂泊の旅を終えて、ひよろひよろになって鹿児島に帰りついた。

当時は万事が安い昔で、安宿一泊二十五銭程だったと思う。

かようにして、学業にも、さしていそしまず、中学は卒えたが、さて、高校の入学は相当に難関であった。当時は第八高校までしかなく、全国一斎の同時試験で郷土色に偏しないために、全国から英才をもとめる制度が採用された時に折悪しく遭遇した。幸いにも、私は旧制七高の第一部英法科に入学が叶えた。入試新制度によって、鹿兒島在中学卒は非常に少く、東京在の優秀校や、京都、神戸その他の卒業生が多く、私の英法クラスの如き、同郷人僅かに二、三名に過ぎぬ淋しさであった。但し、この全国一斎の入試制度はコンピュータもない昔のことだから、試験官の過労その他の都合で、二ヶ年にして実施採り止めになった。

さて、私は入学後、担当教師として、帝大哲学科を恩賜で卒えたばかりの新進の哲学者、岩下壮一先生が受持つてくれることになった。同師は、当時、関西の諸事業に対し、金融的に援助し、有名を馳せた北浜銀行頭取岩下清周氏の御曹子であった。が、父君に背き、金権に対しての叛逆者として、敢て哲学の専攻に進ん

だ師であった。長身白哲で、いかにも貴公子然とした風貌の学者であった。高校の生活は弊衣破帽、実社会とは、全然没交渉で、人生を語り合い、天下国家を論じ、ある時は恋愛をも話しあつての日々であった。

私は弁論部に入り、論壇に立つたりもした。鹿兒島は、前景に火を吐く桜島を控え、海洋の地でもあるので、ボート部にも属した。勿論強健を偉丈夫ではないので、正選手ではなく、クラスでの同志と競艇を楽しむぐらいのものであったが、琵琶湖で鍛えた京都一中出身の組と、鹿兒島一中卒の對抗試合に出て、勝を収めて祝杯をあげたりもした。

さて学業の面では、精を出して、いそしむ男ではなく、まづまづの成績にすぎなかったものゝ、どうしたことか、私は担任の岩下壮一師に身びいきを受け、妙に気にいられた。それで、老婆を雇つての岩下師の独身宅に、しげしげ出入りしては、学業以外の思想的教えを受けた。二人きりでフライパンの中に飯とバターを混ぜ、こね合せてつゝきあつて夕食をしたり、庭先のジャポンをもぎとつては食後の果物としたりした、師弟の仲ではあったが、全く書生同志の交りのごとく

親しんでもらった。当時は第一次欧州戦争の真最中で、日本は連合軍に参加しての一時期であったが、師は、当初から、ドイツは野望のために道ならぬ強軍を進め、ベルギー、フランスを席捲してはいるが、必要に迫まれて起ちあがったフランス側は、最後には、必ず勝つと自信をもって、私に語っておられた。岩下師の言あげずして、かもし出す哲学的な人生観、社会観、宗教観が、若い学徒であった私に、内心強烈に影響を与えた。ある時は、父君時代の財界・企業界での醜い裏幕や、家庭内での複雑な苦悩をも、私にもらしてくれたいりもした。かくして、生涯忘れ得ない尊い恩師であった。師は、後日、文部省の留學生として渡欧されたが、その際、キリストの聖地を廻遊されて、深く宗教的衝撃を受け、ついにフランスの修道院に身を投じ、神職になり、晩年は富士の裾野在の癩病患者救済病院長として身をさゝげて昇天された。まことに、美しい生涯であった。

話しはあとに戻るが、私の父は野辺勘解由という珍らしい名で、十年の戦役に西郷軍の書記方として若く

して従軍し負傷、かろうじて生き残った者である。漢籍に通じていたせいか、宋時代の詩人「陸游」(放翁) (一一二五—一二二〇) の詩をとくに好んだらしい。

よって、私に「陸游」をとって游吉と命名したといっていた。陸游は近代の文豪魯迅(一八八一—一九三六)と同郷であるが、むしろ不遇の詩人であった。「貧乏物語」の河上肇博士が非常に愛誦して「陸放翁詩鑑賞」を著し、また鈴木虎雄博士「陸放翁詩解」その他の鑑賞書が多々ある。私の母は池田家の出で、従兄は池田孝太郎で西郷軍最年少者として齡十三歳にして従軍戦死した。私の幼少の頃までは、頼山陽が賛えた「健児の舎」なるものがあつて、士族の子弟は何れかに入舎せねばならなかつた。私の舎は共立学舎という武士町在の舎で小学校は昔の寺跡に建った大龍小学校であつた。学校が終ると毎日共立学舎に行つて儒朱子学的素朴剛健な訓練を受けた。家庭での話題も日清戦争や日露戦争のことなどではなく、薩軍敗北の西南の役の話が主で、幼い心を、その戦記で揺さぶつたものである。

父は後、官職に長く勤めたが、私が中学三年の春突然

脳溢血で倒れ、不随の身となつたまゝ約八年間病床にあつて逝去した。ために、家計は日に日に貧しく、母は非常な苦勞をした。その中であつて、私は至極呑気に、中学を了え、順調に高校に進み、将来に向ての榮光を夢見ていたのである。岩下師に親しむにつれ、自身の置かれた現境に鑑んがみ、将来に對しての懷疑をいだくにいたつた。當時の高校の生活は弊衣放唱天下國家を論じ、人生を談じて、将来への夢は榮達であり、權威であり、財宝に過ぎない。にも拘らず、病臥の父を擁し、貧に泣く母をもつて、吾れのみが將來の榮光をもとめんとすることが、果して選ぶべき人生の道であるかどうかの懷疑がつのり始めてくるのであつた。學業何物ぞ、帝大何の意味あらんやと、思い悩んだ。ついに學業を放棄して、實社會に飛び出し、貧しい家計の一助ともならんことを決心しはじめた。この事を、先づ岩下師に相談したが、師は不賛成で、心を許す友人達も、また、病床の父も、母も勿論反對した。そして飽く迄も進學して、大學を了え世に出ることを望むのであつた。

私の一徹な決心は容易に翻意する氣にはなれなかつ

た。その頃、病身の父がなけなしの金で、大隅の山中に雜木山を買いとつて他人に託し、炭焼山を経営し、その僅かな収益で、私の學費や生活費をまかなつていたが、その仕事も他人まかせで、うまく行く筈がなかつた。私は、自分の道をさらに、思い直してみる時間をおくために、一時學校を休んで、炭焼山の生活に這入つた。今では、大隅の山中も大分ひらけては来たが、當時としては人里離れた未開の山地であつた。炭焼きの勞務者は出稼ぎをもとめて転々と移り歩く山男達ばかりであつた。山の住み家は仮りに設けた、藁ぶき小屋で、かろうじて雨露をしのぐにたる粗末なもの、夜は隙間から星空や月がさしこむ詩情もあつた。山男達と炭火の埋火を囲んで夜語りをしながら寝るのである。山男達はいづれも世の暗い奈落を歩き廻つて来た連中ばかりで、十二、三人の山男達のこの集團生活は、私がかつてまで窺い知らなかつた野生そのものゝ生活であつた。私も山男達にまじつて原木を伐り、険しい山の傾斜を運びあげたりして働いた。風雨にかゝわらずの山の勞働であつた。山男達の大方は老組が多かつたが、若い者は夜ともなると、此一里も離れた村里の娘子の

もとへ、夜遊びに出かける者もいたし、老組は焼酎の茶碗酒で、うさを払らして、高いびきでごろ寝するのである。雨天のつゞく日は炭焼きも思うにまかせず、原木伐りと、木運びに過すことがおうかつた。私の隣りにごろ寝しがちな若い男がいた。年は二十三、四歳と見えたが、存外無口で、まじめに働く男だつた。夜も女をもとめて村里へ出かけるでもなく、私と何くれと話をして過していたが、ある夜、寝物語りに、彼は『私生児で世に籍もなく、世にうとまれ、転々として仕事をもとめては生きて来たが、もう生きて行くのが、いやになつた。で常時死薬を携えて、生きることに行き詰つたら、自殺することにきめていゝ』と語るのであつた。他の山男達とは異り、どこか見どころのあるような、まじめな男だつたが、既に生きる力を失つてゐるようであつた。昨今と異つて昔の私生児ともなると村八分で、人々は白眼視した。私も彼を勇気づけようと、いろいろ慰めもしたが、寂寥として殺伐な山気は彼を奮いたゞせるすべもなかつた。己れ自身の罪業なくして世にうとまれて生きる人の悲しさに、私の心まで沈むのであつた。人はそれぞれに哀しい運命を

もつて生きるさだめに、私の若い心は、はなやかな高校の生活と裏はらな悲しみをもつた。かような、人里離れた炭焼山の生活を三ヶ月ばかり過して、私は再び鹿兒島へ帰り、岩下師を訪ねた。

そして、学業を放棄して、実社会に出る許しを再度願つた。一夜遅くまで、師と話し合つたすえ、私の決心の固いのを知つて、では己むを得ないと許してもらつた。早速、両親を説得し、また親しい友人にも赦しを受けたのだつた。それは、私が高校二年の秋で、二十歳の時であつた。病床の父も母も、いかにもやるせない哀しさを噛みしめて、許してくれたのだ。岩下師は、高校長と相談のうえ、五ヶ年間で、何時でも復校を許すとの特別の配慮をしてくれた。かくして、私の実社会での放浪が始るのであつた。

私の先輩で、沖雄熊氏という第十五銀行の重役がいた。当時、この第十五銀行は、宮内省が大株主で、華族界や、その他有力な人々が株主で有名銀行であつた。松方正義候の長男巖氏が頭取であつた。そこで、私は沖重役に何れか有力企業への就職を依頼した。全氏の

弟が、当時日清汽船会社の重職にあったので、支那大陸に雄飛したい夢を抱いて、全汽船会社への就職を特に希望した。ところが、沖氏は私の父が病床にいるので、遠く支那に渡ることは差控えるべきであることを戒め、第十五銀行への入行をすゝめられた。私にとつては、いさゝか不満であつたが、不本意ながら、その好意にさそわれて、遂に第十五銀行に入社することゝなつた。本店は東京にあつたが、関西以西を統括する拠点として、大阪市淡路町にその本部支店があつた。

まづ、その本部の調査部に入り、初めて、ソロバンなるものを教わり数字や文字を綺麗に書くことに始り、その他銀行業務の概容を学んだ。銀行の寮が今の豊中であつて初めて寮生活に這入つた。銀行の幹部連で俳句の会が時折りあつた。私も、七高時代、朱印南蛮という俳人がいて、その先生を呼んで、同好の友と妙しばかり、俳句を楽しむことがあつたので、私も、新行員ながら、仲間にはさそわれて、俳句をものした。このお蔭で入行間もないのに、幹部連中に親しまれた。調査部の訓練期間を了えて、天王寺支店の当座係に、いきなり出された。何分多額の金の収支を扱う係なので、

一厘一銭たりとも、相違を許されない業務で、帳尻を正確に合すまで徹夜が再々つゞいて閉口した。徐々に銀行業務にも馴れては来たし、上司達も、私には存外に親切な配慮をしてくれた。しかし、私の生来の思想や性格からして、金銭を取扱う銀行業務は、どうしても飽きたらないものがあつた。

私の先輩で、当時揚子江の漢口市の商業会議所の理事をしていた羽田久太郎氏がいた。私は、ひそかに、書状を出し、支那大陸の仕事に世話してもらいたいと申し出た。勿論銀行の方は内密にしての野望であつた。羽田氏から何んの返事がないまゝに過していた。既に第一次欧州戦争も末期に入り、海運界その他の諸事業も、戦争の最盛期とはこと変り、下向期になりつゝある際であつた。その時、私の遠縁の者が村井汽船会社大連支店長をしていたので、神戸の本社会議に出席の際、会社専務副島茂氏に、私のことを雑談的に話したらしい。ある日のこと、全く突然に、私のもとに一通の速達が届いた。内容は村井汽船の副島専務が、私と面談したいので、急遽神戸の副島邸を訪ねよとの便りであつた。海運業界は国際的に活躍していた時であつた。

で、多少の興味をもって、神戸熊内在の副島邸を訪ねた。素晴らしい洋館建の大屋敷で、テニスコートも庭内にあるほどであった。副島夫妻に初めて面談しての話は、学費の面倒を見てやるから、さらに進学して大学に進めとのことだった。が、私はその好意を断った。

雑談の後、副島氏が、十五銀行も立派な銀行だが、自分の村井汽船に来て一週間ばかり遊んでみないか、そして気が向いたら入社してほしい、月給も銀行より良くしてあげようと、誠に好意に溢れた話であった。

即時の回答は差控えて帰り、三、四日思索した。銀行に世話して呉れた冲重役や、親切に配慮してくれている銀行の上司にも、義理が悪いとも思ったが、両親への仕送りも多少ふえるし、仕事の方も国際的だし、副島専務の並々ならぬ好意も心に泌みて、村井汽船への転籍を決心するにいたった。

当時の村井は、村井吉兵衛氏が、その煙草事業を国家に買収された巨富をもって、銀行、貿易、鉱山、汽船、保険、製糸等諸事業を経営しての所謂新興財閥であった。諸事業の統轄は、東京日本橋際に本部があり、当時としては珍らしく大理石造りのビルであった。諸

事業の幹部は、三井や満鉄等から優秀な人材を迎え入れて、その経営に当らしめ、少壮の人材も好んで入社をもとめる有様であった。汽船の副島専務は華族出身で、三井物産の幹部中より迎え入れられて重責にあつた。肩書は専務といつても、万事まかされきりの専務で、事実上社長と同様の権限をもっていた。英国的紳士で、清潔、洗練された手腕の持主であった。

汽船の社は神戸栄町にあつて、当時三井物産をも凌ぐといわれた鈴木商店や、海運界の覇者山下汽船等も近くにあつた。会社の社員寮は社屋の階上にあつて、私もその寮の一社員となつた。仕事が国際的でもあつたので、寮生活の同僚関係も至極活気に満ち、支那大陸論や国力拡大問題等に、夜ともなれば気焰をお互にあげあつたりした。私の上司は部長として、荻原一郎氏で、神戸高商初期の卒業生で、初め満鉄に入り、後、村井汽船へ転籍したまことに俊敏豪放型の俊馬であつた。全氏の同期は、鈴木商店の総師金子直吉氏の片腕としてロンドンに駐し、戦時従横の大活躍をして、鈴木を一躍大ならしめた高畑誠一氏や、現石油界の大物出光佐三氏等である。さらに課長として帝大出身の山

本龍作氏がいた。全氏は後日、日東海運の社長として活躍して大をなした。就中私はこつびどく荻原部長から鍛たえられて、書簡の字の間違いや、英語の発音のまづさにいたるまで叱正された。が、副島専務の指しがあねもあつてか、船舶事業の概容を迅速に知得するため、荷揚、荷降し、また解の指図等ステベドアーの仕事、船員係り、営業の助手的末端を次々に廻された。

かくする時、さきに漢口商業会議所理事の羽田久太郎氏から、突然書状が来て、揚子江上流の都市長抄の日支合弁銀行に入社が決つたので、旅費一斉も送金するし、宿舍も整えてあるから、速答せよとの急便だつた。時既に、私は村井へ転職しての後で、それでも、月明の夜大河揚子江を航行して、支那大陸に雄飛する端緒を得ることに若い夢が躍つた。が、しかたなく、羽田氏の配慮をお断りせねばならなかつた。人の運命は予測し得ないもので、長抄は、後日内乱戦によつて日支合弁銀行も戦禍を被り、全行の日本人社員も死傷を受けて離散した旨を聞いた。生死の運命とは紙一重に過ぎない。村井の社員となつて、上司にも恵れ、また、友人として、先輩ではあつたが、パリ駐在から帰国し

て、営業担当をやつていた青砥利国氏と、非常に意氣投合して、無二の親友となつた。全君は福岡県人で、寡黙にして、友情まことに濃密な人柄で、しかも俠氣に満ちた良友であつた。今にしても忘れ得ない旧友である。彼は村井を去つて数年後日本は狭くて住み飽きたといつて、ブラジルへ渡つた。渡伯後、私にも二、三度便りをよこして、渡伯をすゝめて、広大な天地の自然に生きる歓びを伝えて来たりしたが、その後、音信も絶え、杳として消息は知れなくなつた。数年前、私もブラジルへ旅行した際、かつての旧友の友情を想起して感無量であつた。全君の消息を追い求めるすべもなく、只々旧友を偲び、茫々たる大地、真赤を夕陽に合掌したのみであつた。

さて、第一次欧州戦争もドイツの敗北によつて、終りはしたものの、日本の海運界を初め、その他の諸企業は、反動的衰退期に突入した。村井汽船もその反動の渦に巻き込まれるにいたつた。が、若者同志の意気はなを燃えていて、神戸という環境から、山登りでの体力造りと、自然を楽しむ遊びが盛んだつた。このことは私の性格に喜びを与えた。毎朝会社への出勤前五

時頃の起床で、再度山上に登り日の出を拝むことを日常としたばかりでなく日曜ともなれば、六甲、鷹取、金剛山、高野山、比叡、吉野へと足を延ばし夜を徹して、二、三の友と抜渉して廻った。仕事の方も活気に満ちていたが、遊びの方も若者らしい健全さがあつた。若者の血が生きていた。再度山から六甲へのトエンテイークロツシングのごとき、山の湧き水の羊腸とした細流を、幾度となく越え歩いては、詩を想い、若い歡喜をいかに覚えたことか、今にしても、忘れ得ない想い出である。

かように、私は村井汽船の寮生活を楽しんでいたが、或る時寮生活を止めて副島専務の宅に来いとのことになった。専務宅には、食客の学生や女中達数人もいる大所帯であつたが、私に来て、食客の学生達の監督として、移り住めとの話もちあがつた。私を村井に入れる口添えをした遠縁になる先輩が、専務が信用して依頼するのだから申し出通りにした方がよいとしきりにすゝめるのだった。それにはほとほと閉口した。専務宅に入居しては、全くの籠の鳥みたいになつて、若さをまぎらす、遊びも思いにまかせぬ不自由な生活にな

るからである。しかし、先輩達もすゝめるので、己むなく熊内の専務邸住人の一人となつた。朝は早く私は社へ出勤したが、帰りは、副島専務の御供をして帰ることになつた。まったく箱詰生活になつてしまつた。

食客には神戸一中生等がいたが、私だけは別格で、時には専務の囲碁の相手もしたり、盆栽の手入れをさせられたりした。しかし、副島専務は華族出身の紳士であつたので、当時としては、所謂気品の高い上流家庭の生活に親しみ、家族どうように可愛がつては貰つたが、世間的庶民一般の遊びも知らずの生活であつた。

ところで、海運界の不況は愈々きびしく、村井汽船は遂に解散の憂目にいたり、副島専務は東京本社の村井貿易専務に転任となつた。私は一時熊内の留守宅を預つていたが、私も村井貿易へ転ずる手筈となつていた。ところが、どうしたことか、多少の無理がたゝつて、不運にも、健康を害し、静養を必要とすることを医者から言渡され、会社を止めて、いよいよ静善の身となつた。

その静養地は南九州の暖地で、日向の南端志布志湾に沿つた今の串間市（当時は福島村）で白砂長汀の海

の村落であった。丁度その頃、同志社神学部卒の若い伝導師の二人が、私と同様に病を得て静養のため、その海村に来ていた。それは、江川栄君と松本宗吉君の兩人であった。同病相あわれむの次第で、自然両君と親しくなり、日々白砂の長汀を散策して歩いては、宗教を語り、人生を談じたりした。江川君は飄々たる哲人肌で、後、東京の本郷教会から、ケンブリッジ大学の神学部に入り、晩年は、同志社創立者新島襄師の旧居を守り、安中教会にあつて布教につとめた。松本君は歌人風で短歌もよくしていたが、会津若松の教会にあつて布教につとめた。晩年西宮市在の教会の神父として聖職をついだ長男のもとで昇天した。彼が、会津若松時代一度私は教会を尋ねて、若き昔の想い出を語りあつたこともあつた。江川君も、子供達何れも聖職に身をさゝげ、信仰に生きぬいた仕合わせな人生を送つた人々である。

よき、先輩、よき師、よき友との出会いほど幸せな喜びはまたとない。この信仰に生きた友、行きずりともいふべき両君との交友は、至極短時日ではあつたが、私の生涯に、さわやかな印象を残してくれた。静養と

いっても、徒食徒費して過してばかりもいられないので、黽しても食い扶ちを求めねばならなかつた。そこで、今の串間市から約四里ばかり離れた都井村の小学校の代用教員の職を得た。今は野生馬の育生地で、觀光地として脚光を漸くあびて来たが、当時は全く辺鄙な農漁村で、世の中から遠く忘れ去られたような、ある意味での桃源境であつた。それでも、村の村長は日高倉吉（故人）といつて県会議員でもあり、南日向では有数の山林もちであつた。宿屋らしい宿もないところなので、この地を尋ねた若山牧水や、画家、詩人達の旅人は大体この日高邸に泊した。日高氏もこうした人々と語りあうことを何よりの楽しみにしていた。私も、小学校の代用教員の薄給を得て、地の果てのような村の一住人となつたが、日高村長に、この上もなく親しくしてもらつた。昼間は、代用教員として児童達を相手にし、夜は村の青年達を私の下宿に集めて、英語や、その他社会学を教えたりした。村をよくする会をつくり青年達と、村の道路普請などで早朝から鍬をかついで奉仕の業もした。夜の談合の中で、養鶏、養豚、椎茸栽培の共同事業を勧めたりし、私もその仕事

に参画することも約した。かような成行きで、村の青年達からの信頼をうけた。彼等青年達の持山から、杉材を伐り出して、私のために家を造ってくれる話しまで出たりした。日高村長も、都井村に長くとゞまつて、村の開発のために助力して欲しいといつてくれた。青年達と「都井の岬が夕陽に染めば大漁戻りの帆が並ぶ・・・」の唄を作詩したりもした。

第一次欧州戦後は、日本全体に人道主義的な思想が澎湃として起り、賀川豊彦氏の神戸スラム街での「死線を越えて」や一灯園生活、さては、武者小路氏の「新しき村」の生活に生きる人道的共同思想に、若者は影響されることが多い時代でもあった。私も、こうした思想的影響にもよつたが、村の人々の人情の美しさ、春宵ともなれば、えも言われぬ田園の香り、大地の幸、海の幸が、私の心をどれほど安穩にし、平和にし、また、児童達のけがれなく澄みきつた瞳が、私の若い心に歎びの灯をとぼしてくれたことか。この生活は、神戸にあつて村井汽船時代の若き血に燃えたつ日々とはうって變つて日常が自然のまゝの詩であり、物語りでもあつた。万一、そのまゝの生活をつゞけて来たとした

ら農民運動の一端を担い得る男になつていたかもしれない。かゝる生活が一年余もつゞいた際、村井貿易の副島専務から一過の速達が突然届いた。『至急上京しろ、村井貿易大阪営業所主任に任ず』の申し出を受けた。人生の道行とは、まことに射程の中に入れ難い不測のことが湧いて出るものだ。そこで、この事を日高村長や、小学校長、青年達にも告げて、かつて恩恵を受けた副島専務からの要請でもあり、断り切れない旨を述べて、別れを惜んだ。青年達は、私を峠まで見送つてくれた。

かくして、私は大阪市淡路町在の村井貿易営業所の主任として働くことになつた。まだ大正時代の末期でもあり、貿易業務といつても、さして多端なことにはなかつたが、田舎出の代用教員生活から、角帯をしめての商取引の真只中に、ほうり出された訳だ。これも副島専務及び荻原一郎氏（貿易の常務に転任）の汽船時代の私をよく知悉していらつた賜であつた。元來私自身の生い育つた環境、それに性格からして、実社会の商取引にはいかにも不向きを男なので、大阪商人の中にあつての仕事は、流石にとまどいがおうかつた。

当時は鈴木商店も戦後の破局にあり、現在の日立の前身である久原の商事部も淡路町の近くにあり、土修町は薬品問屋が多く、新斎橋通りや、淡路町一帯は、雑貨や、羅紗問屋町であつた。さきに破産してしまつた安宅商会の如きも近くにあって、北欧よりのパルプ輸入の件等で取引があり、武長等は輸入薬品、及びその原料、竹馬や小西商店には英国より輸入羅紗の取引と

いう次第で、見本を携えては注文を受けたりもした。外国為替の変動が激しい際で、その大暴落によつて、機械類輸入商として古いにせの有名な高田商会が潰れたりもして、経済界金融界は、その変動の敵しいのに一憂また一憂の多難な時期でもあつた。かゝる際に、たまたま片岡直温蔵相の失言から金融経済界の大パニックが起り、金融界では台湾銀行、十五銀行の大銀行をはじめとして、諸銀行の破局を引起した。勿論その渦中に村井銀行も沈んだ。川崎造船その他の企業もバランスを失し、海運界はもとよりのこと、貿易会社も手ひどい傷手を受けた。村井貿易もさきにロシア革命によつて、ロシアに輸出した綿及び銅の不決済を蒙り、大打撃を受け、救い難い窮状に立到つた。ために、

取引を積極的に進めるのでなく、取引の後始末に追われて難儀した。従て、淡路町の事務所を閉じて、一時川口在の村井鉞業に事務所を移したりして残務に當つた。かゝる未曾有のパニックによつて、戦時中隆盛をきわめた海運界は一転地獄の奈落到ちたように淋びれ、窮地になつた。

郵船と大阪商船は国策会社の役目をもつていたので、例外として、その他の国際汽船（鈴木商店主宰）を初め山下汽船等々一斉に悲境にあえいだ。村井汽船は既に解散して、業務は終了してゐた。当時は憲政会総裁加藤高明首相の時代であつた。ドイツとの講和が終結し、ドーズ案という賠償案に基き、日本へは、無線機その他のドイツ製機械類を賠償品として送つて、つぐをいをなすことになつた。日本政府は、さきにドイツに対して賠償金として総額八億円を要求してゐた。その中六億円が船舶の損害で、郵船、大阪商船を除く民間船舶の損害は、四億円と見積られた。従て敗戦の賠償として、日本政府がドイツから諸機械を受取る事になつたので、船舶の損害を蒙つて窮地にあつた民間船舶会社は、戦時船舶損害調査会なるものを組織して、

日本政府に対し、その蒙った損害の補償をもとめる運動を始めた。そして、この調査会の会長が、鈴木商店の御大金子直吉氏であった。村井汽船も戦時中連合国側にチャーターされていた船舶が、地中海その他でドイツ海軍によって撃沈されたものがあつたので、勿論この調査会の一社として参加することは当然であつた。ところが、村井汽船は既に解散した後で、さきに汽船在勤の者は村井貿易在勤の私のみとなつた。勿論会合には、かつての副島専務が出席すべきであつたが、調査会の本部が神戸にあつて、会合も神戸で開催される関係もあり、再々の会合に、東京在の副島専務は出席しかねるので、私に代理出席して内容を報告せよとのことになつた。

この調査会は、神戸の前ドイツ総領事館が神戸商業会議所になつていて、その会議所に集り、打合せすることになつた。そこで、若輩私が副島専務代理として出席した。二階の会議室の隣室が控室になつていて、石炭をもやしての暖房になつていた。部屋に這入ると、グリグリ坊主の鉄ぶちをかけ、だぶだぶの服を着た一老人が、椅子にかけて暖房守りをして居るかに見受け

られた。そして私に椅子をすゝめてくれた。私は、商業会議所の一老書記かと思つてすゝめられるまゝに椅子に寄り、他の出席者を待った。その中に有名な山下汽船の社長山下亀三郎氏や、戦時中船で大賭けをして、朝鮮へ虎狩りに出掛たりして一時有名だつた西川氏等錚々たる面々が集つた。そして話題は、当時金子直吉氏が大阪毎日紙上で、鐘紡の武藤山治氏と金解禁問題で大論争を展開し、また、川崎造船の松方幸次郎氏と協力して船鉄交換問題を提唱して、世論を湧きたてている際であつた。この船鉄交換問題は、造船力は日本が米国より遙かに進歩しているが鉄がない、それで米国から鉄を輸入して、その代価を船で支払うという、まことに雄大な案であつた。こうした話題の中心がクリクリ坊主の一老人を囲んでの雑談であつた。私が会議所の一老書記と思つていたその人こそが、まさしく鈴木商店を大になした有名な金子直吉氏であつたのである。山下氏などゝは、「おい君」で話しあつていたが、バケツの石炭を暖炉に入れながら、少しの尊大さもなく、淡淡とした話しぶりであつた。破れたりとはいへ、一時的にも三井物産を凌ぐまでの巨大をなし

た鈴木の大宰相金子直吉氏との出会は、若い私に強い印象を与えた。別室で会議が始ると調査会設立の趣旨を金子氏が詳細に説明し、政府に対する具陳書の内容をつぶさに述べて、一同の賛同を得る順序であった。

その間、二、三の質問に対しても、金子氏自らその回答を懇切に述べていた。かくして、会議が終ると、くつろいでの雑談となる。戦時中世界中に網を拡げていた鈴木商店であったが、或る日、金子氏が後藤新平氏の宅を訪ねたところ、『ドイツに最近生れる赤子はあまり生ぶ声をあげぬよし、ドイツの敗戦は間近い』と聞いて一斉の世界網の諸取引から手を引きにかゝったが、時、既に遅きに失したとの話しや、戦時中ドイツがベルギーの中立をおかして、フランスに攻め入ったから、こんどはスイスの中立をおかして、トルコへ進出するに違いないと思つて手配を進めていた失敗談などが、雑談や、懐古談となつたりして興味まことに深々たるものがあつた。現代としては国際化の時であつて、珍らしいことではないが、六十年前の事件の物語りとしては世界的で、雄大で、敗軍の将談とはいへ、再々開られた会合の都度、その雑談を開くことが何

よりの楽しみであつた。

さて、私としても、大阪での村井貿易の残務が終り次第、東京日本橋際の本社へ引揚ることになつていた。貿易部の大部分の社員は、残務に当る一部を残して辞任し、副島専務も、残務を荻原一郎常務に託して退職された。

村井貿易盛大なりし頃、オーストラリア、シドニーの支店長から本社に帰任して、機械部の部長を勤めていた桜井孝次郎氏がいた。同氏は相馬藩名門の出で、その父君の主宰した地方銀行が潰れたため、高商卒後、渡米し、アメリカの大学卒後、村井貿易米国支店に就職した人で、語学の非常に達人な人だつた。本社機械部長の際大阪へ出張して来ては、私と協力して大阪市水道局官公庁関係の注文をとるのに働いたことがあつたが、共に机を並べて仕事をした程の親しい間柄ではなかつた。貿易解散後、桜井氏も退職された。私は荻原常務のもとで、東京本社に、残つて残務に當つていた。忘れもしない昭和二年の初秋桜井氏が新設のビクター蓄音器会社に入社されたよしを仄聞していた。丁度その頃である、私のもとに桜井氏から書状が来て、同氏

の助手として働いて呉れないかと依頼して来た。もともと、私は芸能界とは性格的に縁遠い男だし、ましてや外人関係の会社ときているし、申入れにてんで乗気はなかった。さらにまた年末近くなって再度桜井氏から依頼が来た。が、それでも、私は自分の航路に、多少の自信もあつたので断りつゞけた。

その翌年早々荻原常務から呼ばれて、桜井氏が私を是非ほしいと申入れて来たこと、そして、月給もたっぷり出すと言うし、会社も将来立派になる企業だから、考えて見てはどうかと勧められた。御承知の通り、私は、音楽のオの字も知らず、ダンスのダにも縁なく、粹いな遊びも知らずに十年間もの放浪をして歩いた身なので、さてどうしたものかと迷つた。実を言うと、他に適当な仕事は何れの里にもあると思つてはいたが、荻原常務もしきりにすゝめるし、月給もたっぷり出すというし、桜井氏も立派な人だしするので、遂いビクター入社を決心し昭和三年四月一日から、桜井氏の助手として入社した。初めの月給は一五〇円、今に換算すると相当な高給になる。私が丁度三十才の春である。

旧制七高生活を棄て、実社会に飛び出して放浪しは

じめてから十年目になる。しかも、この放浪の十年は、社会の状況も走馬灯のどとく変遷し、パニツクにつぐパニツクで、まことにめま苦しい十年間であつた。私にとつても、学生生活をやめてから、先づ、炭焼山に入り、銀行生活、大陸を夢見ては汽船会社に転じ、さらに挑源境のような田舎の代用教員、また呼び出されて貿易会社、そこでは鈴木の大をなした金子直吉氏や海運界に一時覇をなした山下亀三郎氏や西川氏等と共に海運界救済の会合に再々列したりもして、まことに多岐極る放浪であつた。が、お蔭で人間生活の表裏、さては多少国際感覚をも知得して、私の心は多彩なものを蓄電し得ていたのであつた。

さて、愈々ビクター創業の父ベン・ガードナー氏との巡り会いとなる訳である。ガードナー氏（以下ガ氏と呼ぶ）に桜井氏が紹介してくれて「犬のマーク」の社員と、初めてなつたのだが、「ガ氏」との初対面は、別に特別な感想とはなかつた。会社は横浜市町村町在の全くの平屋建バラックであつた。大理石造りの村井本社ビルとは、外見大変な相異であつた。工場と事

務所は、セイル、フレザー商会の木材工場を臨時に改造したもので、裏には小高い山があつて、風のある日には、建物の隙間から、ほこりが吹き込んで来るような事務所であつた。最初はビクター蓄音器販売会社と称し、工場とは別であつたが、間もなくビクター蓄音器株式会社として合同一体となつた。文芸部吹込所はセイル、フレザーから転職した岡庄五氏が担当し、営業本部、経理部、工場は中村町にあつて、全部門をガ氏が社長として総括管理した。経理部は米社から赴任した、ゴールドスミスという大学出の若い部長、その下にセイル、フレザーから来た英人のクランチ氏がいた。

本部にはガ氏の助手として、セイル、フレザーの専務をしていたアール、オースチン氏が転職して来て居り、その他事務関係の日本人社員は小人数ながら岡氏を初めフレザー商会からの転職者で占めていた。工場は米本社からのステムシオン氏が工場長、原盤製造部に米社からのスターツ氏だけの外人だけであつたが、大阪探台として本国からガ氏が連れて来たキャンベル氏が関西市場を見ることになつて来た。ビクターの創設にはセイル、フレザーが世話役となつていたので、セイ

ルから転じた日本人社員が主になつて来た訳だ。従てこれ等の人々は外人との接し方も要領を得ていたし英会話も達人だつた。

桜井氏は無関係の畑から入社されたのだが、言葉が至極達者で、正直正廉な人であつたので、ガ氏の信任は自から厚くなつたのは当然であつた。ステムシオン工場長が、桜井氏の語学力は遥かに米人を凌ぐとほめていた。桜井氏と私は商館関係ではない別世界から入社した訳で、私は、桜井さんの蔭にかくれて、カタツムリの如く、小さくなつていた。勿論ガ氏との接触も直接なく、桜井氏に万事外人関係はとりきつてやつてもらつた。ところが、営業販売業務となると、当然売捌元や、特約店関係の事務となるので、日本の事務が一般である。この実務にかけては、私は自信をもつていた。銀行にもいたし、諸会社を転々として、取引関係のトラブル等にも経験をもつていたので、業務は平気でこなし得ると思つていた。それに高校時代一通りの語学もやり、会社を涉り歩いただけに、英訳、和訳の仕事も上手下手は別として、即座にこなし得たが、英会話となると、からつきし駄目で全く閉口した。桜

井氏の留守の際のごときは、ガ氏やオースチンがやって来て、多少のやりとりも必要だったが、こみ入ったことになると不得手で、隣のフレザーからの社員に通訳してもらったりした。それでも桜井氏は安心して私に委かしてくれた。

しかし、会社全体の雰囲気、私の性格にどうしても、なじまないものがあつた。昼食休みのごとき、日本社員の一部はタイピスト達とダンスをしたり、ふざけたりする仲間には融け込めなかつた。桜井氏は別として、語るにたる友人もなく、日常の話題もつまらなしいしするので、只々仕事一途に、だんまりの孤独な一社員に過ぎなかつた。それで入社後、二、三ヶ月目には、上司の桜井氏には信頼きれ、月給もたつぷり貰つてはいたが、余りの馬鹿馬鹿しさに、心密かに会社をやめたいと思つていた。そして、この事は私の本当の告白である。思いもうけぬ道に迷いこんだものと失望した。思想的に語るべき友もなく、また、仕事自体が芸能に関するものときているので、私にはまことに縁遠い道に迷い込んだ思いがした。それでも、日本の事務にかけては自信もあつたので、葉巻きを燻らして

威張つているロードセイルスマンの如きには、日本の書状も完全に書けない人物もいて、私に、ひそかに依頼して来る向きもあつた。かように、未だ国際的に幼稚であつた日本での外国会社の創業は人材も玉石混合で、ちぐはぐ極るものがあつた。社内も、セイルスマン報告も全部英文によるものであつたが、それ等は私にも容易に処理が叶つたが、英会話による外人との折衝や説得には閉口した。ガ氏とオースチン、桜井氏と私は、だゞっぴろいバラックの一室にいて事務をとつた。経理部は別棟にいた。かような訳でお互の一挙手一投足が歴然としていた。

さて、主題たるベン・ガードナー氏はカナダ、ピクターの副社長から日本でのピクター創業の重責を負うて赴任したと仄聞していた。日本は初めて踏む土地であつたようだ。彼のルーツをたづねる必要はないが、やはりユダヤ系のようで、民族的に、幾多の困苦なめた血統を享けて、米国に移り、ピクターに籍をもつた人物であつたように想像された。当時年配は五十余歳で独身であつた。外人にしては、長身細身で、はげしい労働をしたような頑強な体質ではなく、掌、指の

ごときも、むしろ、やさしい指型であった。頭髮はややちゞれ髪で、額が広く、頭頂は既に薄く、地肌がはつきり見えるほどで、年輩のわりには、尠しくふけていたように思う。従て堂々たる外人の風貌とは異り、やせ型で、繊細な神経の持主であり、金儲うけをしたり、日本人からさくしゅしたりする商人型でも勿論なく、むしろ哲人的風貌の持主であった。これは、私の主観的見方かも知れぬが、今に残っている、私の書齋に常時置いているガ氏の写真からもかように察知される。

それに、ひきかえ、アール、オースチンは英国スコットランド生れで、少しスコッチのなまりがあつて、永く日本のセイル、フレザー商館の重役をしていたせいか、何んとなく日本人を見下したような傲慢な人柄で、堂々たる体格の男であつた。初め、日本の事情を知らないガ氏の補助者としてピクターの重役にはなつていたものゝ、ガ氏は、彼よりも桜井氏を頼りにし、信頼していたように見えた。ガ氏がオースチンを叱りつける時も再々で、かゝる時は、オースチンは倉庫に行つて、口笛吹き吹き歩いている様は、むしろ滑稽に

も見えたし、小気味もよかつた。結局、彼は商館ずれをしていたせいでもあつた。そして後には退職してしまつた。大阪探台として重責を託されたキャンベルは、日本市場のことが、よくわからず、成績も揚らず、ガ氏から電話口でひどく叱られていたが、ついに神経衰弱気味になつて本国へ送り帰えされてしまつた。これが私が入社して四、五ヶ月目頃と思う。そして、その後任としてガ氏に信任厚い桜井氏が大阪探台の重責に抜擢された。

当時の大阪営業所は関西以西の重要な市場をまかされる拠点でもあるので、ガ氏が如何に桜井氏を信頼していたかは想像される。このことがきまつて、さて桜井氏の後任は誰人にするかとなつた。私も、この桜井氏の突然の転任で、いさゝか途方に暮れた。この仕事はガ氏に直属し、オースチン氏の指図も受けねばならぬ重要な職務であることは勿論であつた。私には、実質的業務はやりおゝせても、ガ氏やオースチン氏と意志の疎通を得て、発表説得等には未だ自信のない私であつた。入社して未だ日も浅いことだし、私より遙かに年上のロードセイルスマンを指図したり、売捌元等

との交渉に当ることは容易なことではなかった。おまけに、会社自体の仕事に理想ももてず、やめてしまかうかと、心密かに悩んでいた際でもあったので、尚更ら困ってしまった。ところが私の日常の仕事振りを同室にいて親しく見守っていたせいもあって、若輩の私に桜井氏の席を引継いでやれと、ガ氏の命を受けた。私が三十歳、桜井氏とは年輩でも十三才のひらきがある若輩であったので、いさゝか戸惑ってしまった。それと同時に月給も三〇円昇進して一八〇円となった。桜井氏も大丈夫だから安心して自信をもってやれと、勧めてくれた。

愈々ガ氏の直屬として営業全般を見なければならぬ破目となった。親しくガ氏の訓育を身じかに受ける立場になった。言葉の方も、多少馴れっこになって他の通訳の世話を煩わさなくてもどうにか通じるようになってはきたものゝ、営業方策等について、意見を卒直に述べ、議論を戦たかわしたりするには不十分であったが相当に頑張つて行くより仕方がなかった。この席についた時、ガ氏が私に初めに言ってくれたことは、『自分がどんなに忙しい時でも、自分のもとに相談に

来、また意見を卒直に述べることに決して躊躇するな、何時でもお前の相談相手になってやるから』といつて呉れたので、私の心はややほぐれた。私は母と二人きりで蒲田に住んでいたが、こうなれば責任も重くなるし、夜業もおそくなるので、会社近くの磯子よりの所に移り住んだ。

私の仕事は、各営業所との連絡、売捌元との取引交渉、諸特約店の契約事項、ロードセールスマンとの連絡指図、さらにビクターに関する記事や、業界についての新聞記事の英訳、売捌元よりの陳情書等の英訳、また米本国よりのレコードに関するサーキュラーの和訳等々まことに多岐に亘る仕事を一人で引受けねばならなかった。で、毎日遅くまで居残り、日曜も祭日ともなかった。音楽の方の学もなく、興味の「興」も全くなく、その職責を果すのに邁進するのみであった。ガ氏が若輩の私を信頼してくれるのなら、断然その信頼に答えたいと思うにいたつた。ガ氏も、私と共に夜遅くまで仕事をしていたが、私も万端の業務を処理するのに、連日連夜遅くまで勤めた。或る夜、ガ氏と二人きりで居残っていた時、ガ氏が私の机に、ことごと

やって来て「お前は何処に、そして誰人と住んでいるのか」と問うのだった。会社の近くに母と二人で住んでいる旨を答えると、ガ氏は、私の手をとらんばかりにして、「自分は十五年も前に母を失った。母と共に今なをあるお前は、自分より遙かに幸せだよ」といつて自分の机へ帰ったと思つたら、またのこのこやつて来て、その日、静岡を廻つてゐるセイルスマンが、ガ氏への土産として帰つた玉露茶の一罐を、私の机上にぽんと置いて、『これを、お前の母さんと今夜一緒に呑みなさいよ』といつてくれた。しんみりとした不言の情味が心に沁みだ。かような些事が、私をガ氏に惹つけていった。私には全く不向きな迷路に這入りこんだと思つていた思ひもいつの間にか消えて行つた。

ある日曜のことであつた。誰人も出席していない、ガランとした事務所に残務を片付けるのに私は机に就いていた。ところが、ガ氏が若い経理部長のゴールドスミスを帯同して現れ、社長席についた。森閑とした事務所での話声は私にもよく聞きとれた。ガ氏がゴールドスミスに向つて「米國カムデンの立派な本社に較

べれば、この社屋は馬小屋同然だ、若いお前には不自由がちで心淋しいだろう、だが、お前が本所で働いているとしたら、お前の名前をシューメーカー社長が（当時ビクター社長はシューメーカー）認める迄には、尠くとも十五年はかゝるだろう。今お前が日本での経理部長として、重要な経理書類にゴールドスミスのサインをして、本社々長の許に届ける度毎にお前の技倆のほどが判るのだよ。だから一生懸命に辛抱しておやんなさい』と児供か弟子にさどすようにして励げましている様子を、私は仕事をしながら聞いて、有望な青年社員員の訓育にいかにか心を注いでいるかに感動した。そして、この事は、外人と日本人とを問わず人を大事にする事だつた。

ガ氏は常にいつていたが『工場や設備は金さえあれば短期間で出来るが、人を育てるには尠くとも五年はかゝる。良き人材を得ることこそは事業の大本である』と事業は人なりの哲理を教へていた。文芸部担当の岡庄五氏から売捌元の口添えもあつて、長唄の名人を吹込みたいと申込みがあつた。たしか吹込料は当時として、金壹万両であつたと記憶する。さて、これが売

れるかどうか、ガ氏には見当のつきかねるやみくもの件であったが、その決断にあたって、「岡氏の教育費」として支払うといつて即決した。これも人を育てる言分であった。

大阪所長に転任した桜井氏のもとから、セイルスマンで旅費の精算やその他が渋滞して困るとの理由で、J君が本社へ帰えされて来た。オースチンは、彼を首にしると私に命じた。一応ガ氏にも耳に入れておきたいと思つて、ガ氏にその旨を伝えたところガ氏曰く、「不正があつたら己むを得ぬが、そうでなく、本人がビクターに働くことに満足しているのなら、首にしないで使つてやれ。人にはどこか使い道があるものだ」といつてオースチンの命は取り止めになった。私は彼を広告係に廻してやったことがある。長年会社重役として働いた森君が大学を出たばかりで就職の際、私が紹介したが、ガ氏は「将来はこの椅子が待っているよ」といつて自分の椅子を叩きながら云つてはげました。社内には洋楽に通じている者が誰一人といないので、その道の馬場君を採用するに當つて、全君が、彼の著述の数冊を携えて来て説明していたが、ガ氏はそれに

一顧もふれず「お前が過去に何をしたかは、不問のこと、只将来お前が何を為し得るかだけのことだ」といつて仮採用をしたが、彼は洋楽普及のために、ビクターのためばかりではなく、日本の洋楽普及のために偉大な功績を残した。

桜井氏が本社で打合せを終つて帰阪するので、私は全氏を見送りに、母を連れて横浜駅に見送つた。ガ氏は上海に出張する際に、桜井氏と大阪迄同行することになつていた。で、ガ氏をも見送ることになつたので、私の母をガ氏に、それとなく紹介した。するとガ氏は、私の母の手を両手でとつて「あなたは良い子供さんをもたれた。安心して下さい。私がお預りして、立派に大成させて、さしあげますから」と心情溢れる言葉をかけてくれるのだつた。母は何事をガ氏が云つていいのか判らなかつたが、側で、その言葉を聞いていた私は、胸がジーンとして、その温情に心ひそかに泣いた。かくして、私はガ氏の魅力にとりつかれて、ガ氏の懐に完全に蘇生する思いとなつた。ガ氏は、私に、こんなことも言つてくれた。「自分のもとで、二年間働いたら、自分が長年経験して来たことを、全部教えてあ

げよう。そしたら、お前は立派なビジネスマンになるよ」
とも折にふれていった。また、自分のことについて、
つぶやくように云っていた。「自分には相当な財力も
出来ているので、かく迄して働かなくもよいのだが、
責任を負わされたからには、その責任を果すために、
昼夜をわかつたず、こうして働いているのだ」とも云い、
それ迄日本に来て働いた外人の多くは、日本人を真か
ら信じ愛していた者は少なかったとも、洩らしていた。
それだけに、外人の社員よりも、日本人には寛大で、
愛情をもって接していたように思われた。

私の仕事も漸く落着いて来たし、私の席も安定して
来たので、いまゝで苦勞をかけた母にも安心させたい
と思つて、初めて結婚する気になった。それも中学か
ら高校時代を通じ、その後も竹馬の友として心が通つ
ていた牧元隆雄君が大学を卒えて安田銀行に入社し、
私の妹とさきに結婚していた。この牧元夫妻の世話に
よる結婚式を、その年の十二月にあげることにした。
で、三日ほど休暇がほしかったが、ガ氏は独身で、連
日連夜働きづめだし、私も仕事が、まことに多忙で、
寸暇もない際であつたので、ガ氏に結婚のことを打ち

あけて、休暇をとることを、いさゝかためらつていた。
愈々挙式の数日前になつて申出たところ、ガ氏は非常
に悦び、祝福して「結婚こそが第一だ」といつてくれ
た。のこのこ経理部へ出かけたと思つたら、また、す
ぐさま私のもとに来て、掌を出せといつて、クシャ、
クシャに丸るめた小切手を、私の掌にぼんとのつけて、
「これを全部使つて来るのだよ」といつて呉れた。開
型にはまらない親心があつた。子供に小遣いをやるよ
うな風であつたが、当時としては、相当に使い手のあ
る金額であつた。私の式は村井貿易常務荻原一郎氏夫
妻の媒しやくで、明治神宮で最下級の費用で至極簡單
に行い、箱根廻りを休暇で過し、再びビクターに歸つ
た。かくして、ビクターが縁となつた私の結婚は、既
に五十余年を経て、なを余生をつゞけつゝある。

さて、商売上のことでは、売捌元や、特約店との関
係を大事にし、特約店が繁榮してくれることが、とり
もなをさず会社の繁榮として返つて来ること、そして
この両者の関係は、一族のごとく共に榮えること、
即ちビクターファミリーなる提唱がガ氏によつてな

されたのであった。この提唱語は、当時としての新語であつたと思う。その提唱の観念には、会社は立派な製品を出し、特約店は流通を受けもつ家族の一員として、音楽によつて世の中を明るくし、社会に奉仕し、人々に歓びを興えることだ。会社も特約店も奉仕の観念を基盤として働き、その当然の報酬として、両者共に適正な利益を得て栄えて行くのだ。それで、特約店同志も協力して、この奉仕的商売に当るので、特約店同志で割引販売をしたりして、他の特約店を害することがあつてはならないし、お互の申合せを乱すことは、業界を混乱せしめることになるので、お互に規定の価格を守ることを、嚴重にいましめた。セールスマンも特約店に対し仕入れを無理じいしたり、過分に過ぎるストックを勧めたりしてはならないと注意していた。併しこの事は自由競争を主眼とする現代の公取法の理念とはやゝ異質のものだが、とに角にもビクターファミリーとしての市場組織を、厳然と守りぬくことにガ氏は固い信念をもつていた。そして、このビクターポリシーを常に私達に吹き込んでやまなかつた。こうした観念に基いて、サービス、即ち真のサービスとは何

かを説いた。それは立派な製品を世に送り、需要に完全に答えることで、割引したりすることが、決してサービスでないこと、そして機械にしてもアフターサービスを良くして満足を得ることだ。

ある日曜のことだつた。相変らず残務の片付けで、私は出社しガ氏も出席していた。その時、横浜伊勢崎町の一特約店から、電蓄が故障して宣伝が出来ないから、修理してほしい旨の電話が来た。技術者も誰れもない日なので、困つてしまい、このことをガ氏にそれとなく通じたところ、いきなり自分でその店に行くというのだった。ガ氏も複雑な機械の知識はない筈と思つていたから、修理はとでも無理と思つたが、自分で行くというので、運転手に言付けて、その店へ案内させた。修理に車から降りて来たご人はガードナー社長その人であつたので、特約店主は恐縮千万してしまつたが、結局は修理は叶れず翌朝早々に技術者を差出すことにして、けりがついた。この事が、いち早く特約店間の評判になつて、ビクターのサービス精神の評価をたかめた。

需要を完全に満すという点で、ガ氏は、毎日の出荷

伝票を一々繰って調らべ、未出荷があると工場をきびしく督促していた。そして製品はいつも生きていなければならぬ、その点で、レコードの封筒の端が少しでも折れまがつたりし、またしわが出来たりしている」と製品が死んでいるかに見えるといつて、倉庫係や、出荷係に注意もしていた。たまには、ガ氏の頑固さに困ることもあった。初めてビクターのポスターが出来た時で、その代金の一部を特約店からもらえと、私に命じるので、いさゝか困って無償にして配布するのが通例だと反論すると、ガ氏は曰く、「費用がおいしいのではない。人は無償で貰ったものは粗末にしがちなものだ。尠しても自分の金を払って買ったものは無駄にしないからだ」といつてきかなかつた。これにも一理あったが、売捌元等の口添えを得て、漸くガ氏を納得させて無償配布にしたこともあった。

ガ氏はビクターの信用について高揚した。ビクターは世界の信用の上に立っていること、従つて、製品にしても超一流品であり、従業員の品位も世の信用を裏切るようなことがあつてはならないとして、公私共にその行いの正しさを注意し、ロードセイルスマンの宿

泊にしても、指定は一流旅館に定め、その品位と信用をたかめた。

期末の決算期になると、売上の好成绩の特約店には一割のリベートが支払われることになつていた。水戸にS店という特約店があつて、余り資力はないが、非常な活動家で、最高の売上高を示した。で、その店への最高のリベートの送金が私のもとに届けられた。かねて、同店との約束で、リベートは、その店の保証金に繰入れることになつていたので、送金の必要もなし、また万一送金してやると、資金繰りの方へ転用しないとも限らないとの杞憂もあつて、帳簿上で保証金へ繰入れようと思ひ、送金を保留していた。ガ氏がそれを見て、何故送金してやらをいかと質した。私はその訳を説明したらガ氏は「商取引はお互の信頼の上に成立つものだ、ましてや、ビクターファミリーの特約店を信じ得ないようでは、大きいビジネスマンにはなれないよ。丁重な祝福の手紙を添えて送金してやれ」といつた。かくして、先方へ送金してやったところ、一週間ばかりしての返金に添えて、初めてのリベートで、三日ばかり神棚にのせて、日頃の約束通り保証金

として返金しますと礼状が来た。この事を、ガ氏に通じると、大悦びで、相好を崩してのガ氏は、私の両肩に手を置いて「お前はビジネスの一番大事なことを覚えたのだ」と祝福してくれた。

いまでこそ、セルフメイドマンということは、あまり聞かなくなったが、ガ氏こそは、永年の仕事の場を通じて、その哲学を学び、人を魅惑する人心収斂の心術を身に付け得た偉大な苦勞人であったと思う。現代では新しい販売策や、営業方針も非常に進歩して珍しくもないが六十年前の日本は営業方策等については全く未知で、殊にレコード業界のごときは、その混沌さは云うまでもない状態であった。こうした中であつて現代でいう家族型経営策を既に提唱し、会社、工場、内部は勿論のこと、ビクター特約店をも含めて、ビクターファミリーとして、業界独特の営業方策を推進したことは、当時として、素晴らしいことであつた。しかも、それが、常に奉仕的觀念を基盤としたものであつた。こうしたことから、ガ氏は会社事務所や工場をホームと呼んでいた。新子安の新工場的设计図が出来た時、ガ氏はその青写真を私に『これがお前達の将来

のホームだよ、五年経つたらお前達のものになるのだよ』と示してくれた。かゝる考方が、即ちビクターファミリーの心であつた。

午後ともなると必ず一回は、黒色の帽を冠て工場を一巡し、工場員の人々に挨拶して歩いた。暇な日は、東京に出て、山野楽器店の店先の椅子にぼつねんと独り寄つて、言葉も通じないまゝ、ビクター商品に対しその顧客の様子を見守るのが常であつた。

或る日のこと、重役たる工場長のステムシオン氏が電蓄で、レコード数枚を試験したまゝ、ほつたらかしにしていた。これを見たガ氏は、早速ス氏を呼びつけて、「お前は何んによつてご飯をたべているのか、これ等の製品によつてではないか、かくも粗末にするとは何事ぞ、」と叱正しながら自身で電蓄の肌をやさしくさすり乍ら、レコードを取りそろえて、さとするのであつた。こうした様子に接した私は、ガ氏がビクターの製品に対して信仰的なほどの敬意と愛着をもっているのに感じいった。

ビクターの象徴でもある「犬のマーク」に就て、このマークの宣伝には非常な大金が、これ迄投ぜられた

のだ、そして、これほど世界の信用を得、愛されているマークは他にはないと、非常な誇りをもっていた。このマークこそは、人間愛と平和を啓示するものだと云っていた。なる程、あのマークのバックグラウンドには、静かな平穏さと、暖かい愛が感じとられる。いかに科学が進み、技術が向上しても、その根底に人間愛が欠如して、只単に利益のためのみに走るようではその製品は本質的に眞の生命をもたないものになることをガ氏は暗に教えていたのだ。一見、「犬のマーク」は科学性のないマークのようだが、人間社会の最も大事な愛と平和を示すものである。

ガ氏は、また非常に仕事の上で凡帳面で、或る日のこと、ビクター製品の輸入や運搬を請負っていたドッドウエルからガ氏に直接支払の要求が電話であった。すると、早速にも、その担当の克蘭チ氏を呼んで「お前は、一時の次に二時が来、また三時が来ることを知っているか、」と詰問した。ク氏の「勿論知っていますよ」の返事に「いーえお前は知らない どうして、ドッドウエルの支払を延しているのか」とこっぴどく叱っていた。かゝることもガ氏の凡帳面さとビクター

の信用を重んじた証拠でもあった。

かように、厳格な性格の一面、会社、工場員の宴遊会等には、勿論出席して一同と共に興じ、太鼓のバチを自らとつて、太鼓を不器用な手つきで打鳴らして、興を添えたりもしたが、これも共に働く者達に、心から和するの業であつたと思う。

かくの如くガ氏の一言一句、一挙手一投足によって示されたビクター創立の精神によって業績とみにあがり、昭和三、四年の不況下にもかゝらずビクターは急速な発展をとげた。そして三菱、住友と提携も生れ、新子安の新工場設立の運びとなるのであつた。ガ氏は昭和四年に一度帰国したが、その際、初めての結婚の報がもたらされ、新婦帯同で帰つて来た。そして間もなく、米本社の重役として日本を去つたのである。かくの如く精根をこめてのビクターの創業の成功は、ガ氏にとつても最も憶出の深い一期であつたと思う。ガ氏の後を引継いだのがサマラー氏であつたが、彼はまた守成の逸材であつた。新子安落成式の時、ガ氏は来日しなかつたが、ガ氏の新工場落成を祝する祝文を、私が代読して式場の人々に伝えたのだつた。ガ氏が日

僅かに二ケ年余に過ぎなかったが、この短期間の中にビクターの揺ぎなき企業の強固な基盤が出来、ビクターの大精神が凝結して、ビクターの伝統を創造したのである。

迷路に迷いこんだと思っていた私の迷夢は、ガ氏の導きによって闊然として開られ、百八十度に人生航路をかえて、爾来二十五年間「犬のマーク」のもとで働くことになった。ガ氏が去ってからは守成の人サマラー氏によって、至極順調に企業は推進されて、益々大をなしで行った。しかしながら、日支事変によって、ビクターはRCAの支配下を離れ、その経営は転々として移り変った。私は、サマラー氏からも、ガ氏と同様に信頼を受け、不振の大阪市場を盛り返すために、大阪営業所の責任者として、同地で約四年余を過した。RCAより日産へと移った際、再び本営業担当として帰り、さらに、企業は東芝の傘下に入り、昭和十六年さらに満州へ渡り終戦後人間極限の世界を知るまことに貴重な経験をして、焼土と化した新子安の本社へと生残って帰った。

焼土化したビクターの再建は、どろ沼の中をのた打

ち廻るような窮状に絶するものであった。が、ガ氏かなをRCAの最高顧問として、在勤のよしを仄聞したので、昭和二十二年に会社の窮状をガ氏宛に書き送った。ところが、幸にも、その書状がガ氏に届いたとみえて、私宛に誠に懇功極るガ氏の返書が、思いもつけずに届いた。ガ氏は私が生き残ってビクターに在勤していることを非常に喜び、戦中戦後ビクターの社員のことや、会社自体のことを案じつづけていた旨のことが綿々と書いてあった。そして、ビクター再建のために、出来る限りの助力をしてやるから安心せよと書き添え、それには、私に一度渡米して、実状を報告するか、それとも、先方から社員を日本へ差向けて、援助策を講ずることにするから、待期せよとのことだった。かくの如く、ビクター創業の父としての愛情切々たる便りであった。創業の父はビクターを案じ愛しつづけていたので。

ガ氏の指図によって早速来日したのがストラウス氏であった。ストラウス氏はRCAがビクター再建に、極力助力する意向のあることを示してくれたので、それまで躊躇していた銀行団も協力に決し、徐々に再建

の曙光が見え初めて来た。丁度その最中に、ビクターの再建を夢見つゞけていたガ氏の逝去の訃報が、突然報ぜられた。齡七十五歳であつた。私達はビクター創建の父を失つたのである。

日本の敗戦後の窮状を救つてくれたものは、朝鮮戦争こそが、予期しない神風となつた。この戦争によつて、日本の諸企業は漸く息を吹き返し、一気に急転して、その後年を追うて発展しつゞけて今日の隆盛を迎え得た。

ガ氏日本を去つて後、ビクターの歴史は転々と移り変つたが、私はその破乱にとんだ歴史の主流に生きつゞけて二十余年を過した。会社の流転と共に、ある時はちみもうりようも現れ、再建の途上は暗夜行路にも似た時もあった。その間の変遷の、成行や、秘話の数々は、身をもって知り得ているので、何れ後日更めて語ることにしたい。

ビクター創業の父ベン、ガードナー氏の冥福を謹んで祈り、この稿をひと先づ終ることにしたい。

後記

かつて徳富芦花著「みみずのたはごと」が若い人々に、ひろく読まれたことがあつた。それも既に昔のことだが、私のこの「たはごと」は碌々たる一浪人のたはごとである。八十三才の孤老の「うはごと」に過ぎない。五十余年もの昔、日本に初めて、ビクターの灯を、とぼしたベン・ガードナー氏の憶出だけは、語り残しておきたいと思つての雑文である。この稿正その他は高田繋喜君に多分にお世話を願ひ、また印刷には三和印刷工業の松丸幹雄君の特別の配慮を受けた。

野 辺 老 生

昭和五十六年五月三十日

野 辺 游 吉

鎌倉市二階堂八五

復刻版作成に際して

平成十七年(2005)に「身辺雑記」の復刻版を作り、

私紙の愛読者に配布したのが切掛けとなり、本をつくるという趣味を持つようになった。我が親族の家系をまとめて「森・前北の人々」や「わが家系」、また街道歩きのため作られた資料に写真を添えて「甲州街道歩き」等、本を作成しては悦に入る変な趣味に惹かれている。

当時、河越先輩から「ベン・ガードナーを偲ぶ―若き日の私の放浪記―」についても良い本と聞き興味をそそるが「身辺雑記」復刻版を五部ほどお渡しすると急逝され、驚いた経緯がある。次の復刻目標に思っていたが、どなたが持合わせているのか所在が分からずにいた。

今回、ニッパ―懇で廣田昭さんとホームページで親しく話が進み、高柳会の資料を拝見する機会を得た。その中、平田雅彦さんの著作「松下幸之助と日本ビクター」を読んでその参考文献に「ベン・ガードナーを偲ぶ」を発見する。廣田さんにお聞きすると、読んだことがあるのでと直ぐに資料探索、送付頂き、大変有難く、感謝す

る次第です。お蔭様で復刻版が完成し、嬉しく思う。

現物はB5版で修正具合から推察すると原図は、タイプの清打ち印刷したもののようだ。表紙の様子が不明だが、本文とは別に仕上げている様子である。基本は縦書きで、中表紙が横書きであるのは後で追加したものと思う。また本文は20行、2段に統一されているが、第一頁は17行、2段になっている、活字も違うし修正を加えて入れ替えたものと推察できる。復刻版としては文字数、行数ともオリジナルに合わせて作成した。が、修正で文章が追加された所は文字を繰り返し越した部分もある。形式も作りやすいA5版に変更した。

文中、28頁1段目16行〜19行の経緯は「身辺雑記」で詳細が述べられている。また、中央公論「歴史と人物」昭和四十九年九月号に「混迷の満州、北上救出行」元満蓄社長の手記として掲載されている。

平成二十五年二月二十日

前北 隆司

